

コンコード・ライシーム

小野, 和人
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/5393>

出版情報：言語文化論究. 7, pp.13-25, 1996-03-01. 九州大学言語文化部
バージョン：
権利関係：

コンコード・ライシーム

小 野 和 人

アメリカ・ルネサンス期（19世紀前半期）の文化というとき、今日では主に当時の秀れた数々の文学作品をその成果とみなしているが、この文化の本質は単に印刷活字を通してのみ成立したものではなかった。表に現れた成果を下部で地道に支えている文化的基盤があったのである。その一つは、当時合衆国各地で頻繁に行われていた講演活動である。この活動の母体となったものはライシーム（Lyceum）と呼ばれる組織団体であった。見方によれば、アメリカ・ルネサンス文化は講演文化だったと言ってよいほどに講演活動が盛況であった。以下、その活動の一端を、マサチューセッツ州コンコード（Concord）の町のライシームの記録を参照しつつ述べてみたい。そしてその際に、当時の主要作家の一人であり、自然と人生との関わりをテーマとしたエッセイ *Walden* の作者 Henry D. Thoreau（1817—'62）を一種の視点の人物として言及することにする。というのも、彼の生涯の大半はアメリカ・ルネサンスの時期に相当し、かつ彼の作品のほとんどが彼の講演活動を基盤にして成立しているからである。

(一)

文学辞典の *Oxford Companion to American Literature* によれば、ライシームとは、「文芸や科学の教育のための大衆的なつどい」（“popular societies for literary and scientific education”）と定義されており、¹⁾ 集約すれば「文化協会」とでも言うべき組織であっ

た。要するに、文化の啓蒙活動の団体であり、今日で言えば、日本での地域的な公民館活動に類する行事を行っていたのである。

合衆国におけるライシームの源はイギリスであり、19世紀初頭におけるグラスゴウの Andersonian 大学の教授 George Birkbeck 博士の自主的な行動に基くものであった。博士は、学問の機会のない労働者達に科学の実験的な知識を施す試みとして、「大学の外に講義を持ち出した」という。今日の大学の公開講座や市民講座の如きを行ったのだった。これが大好評で、イギリス各地に広まり、1824年にはロンドンで「職人協会」（The London Mechanics' Institute）という組織が結成された。やがてこの風潮は合衆国にも波及したのだった。²⁾

合衆国におけるライシーム活動の創始者は Josiah Holbrook（1788—1854）であった。イエール大学の卒業生で、地質学者・金属学者であり、熱狂的な性格の人であつたらしい。1826年に彼は、全国的な組織としてアメリカン・ライシームを結成するための宣言を行った。その目標を集約すると、「成人のために教育の機会を与えること、学校において教師の訓練と教育への関心を刺激して高めること、さらに博物学の施設や図書館を設立すること」であった。³⁾ 当時の合衆国ではまだ教育のたち遅れが顕著で、質の良い学校教師の育成と、学歴の乏しい一般人のために教育的な啓蒙活動が切望されていたのである。こうした要望に答えたのがホルブルックで、彼の熱狂的な人柄と势力的な活動は短時日のうちに

ライシースムをアメリカ各地に広めていった。まさに燎原の火のように。

結成宣言のなされた1826年にマサチューセッツ州 Millbury の町に最初のライシースムが設立された。提案者ホルブルックの住んでいた町である。そのわずか3年後、1829年にボストン郊外のコンコードにもライシースムが設立された。この1829年にホルブルックは“American Lyceum”という題名のパンフレットを発行した。それにはこの組織のための、より具体的で実際の活動目標が記されていた。以下の内容である。

1. 会話の質を向上させること。
2. 人々の娯楽を指導すること。
3. 出費の節約を教えること。
4. 図書館活動を活性化させること。
5. 教師の質的な向上のために援助をすること。
6. 私立学校の援助。
7. 公立学校の質の向上のために便宜をはかること。
8. 市町村の歴史を編纂すること。
9. 市町村の地図を作成すること。
10. 農業上及び地質学上の測量をすること。
11. 州の鉱物を採集すること。⁴⁾

以上、10. 11の項目では、地質や鉱物という科学の分野が取り入れられている。これらが実際に地域研究の手段として使い易いという事情もあっただろうが、ホルブルック自身の専門分野が反映しているとみることも否定できない。項目の全般にわたって、地方や地域の文化の育成と学校教育の向上を目指す意図がよく窺えるのである。そして、これらの目標達成のための様々な啓蒙活動の中でも、特に講演会が主要な行事として定着していった。これはいずれの地方でもいえることであり、コンコード・ライシースムの場合でも同様な状況であった。以下、コンコードの場合に的

を絞り、それがいかに組織され、運営されていたのか、具体的にみてみたい。

(二)

合衆国における著名なソロー学者で、かつアメリカの大衆文化の研究者である Kenneth Cameron 教授には *Massachusetts Lyceum* という著書があり、この中にコンコード・ライシースムについての詳細な記録が載せられている。それによると、この組織は1829年1月に成立している。このときの会則では、役員の編成が、会長1名、副会長2名、会計係1名、書記 (secretary) 2名であり、書記のうち1名は会の記録係、あと1名は通信関係の係であった。その他、評議員 (curator) が3名選ばれている。このような役員構成は、ちょうど日本における英米文学会等の支部会の組織を思わせるものがある。年会費は、コンコードの中心部に住んでいる人々が2ドル、中心部以外の地域の人々は1ドルで、18才以下の者は50セントでよかった。また、10ドル出せば終身会員になれたという。⁵⁾

ところで、コンコード・ライシースムが結成されたときに、ソローはまだ12-13才の少年であった。会員として加入するには幼すぎる年令であったが、ソローの伝記の研究者 Walter Harding 教授の推測に基くと、時々大人達に連れられて、講演会を聴いてみる機会があったのではないかと思われる。⁶⁾ ちなみに、大人の会員は、1人につき、8才から14才までの子供を2人まで連れてくることが許可されていた。それに、後の記録では、講演会が少年達の勝手な私語によって悩まされたという記述も時々現れる。さらに、それを制止するための小委員会を作るといふ動きもみられた。要するに子供達の聴講は、何もエリート家庭の子弟だけに留まらず、ごく普通のことであったようだ。

それでは、ライシイアム結成の初年度にはどんな講演が行われたのであろうか。記録を参照してみたい。開催の場所はコンコードの Court House (町役場の建物) の中であった。⁷⁾

1月28日。このときが最初の正式な講演会であった。講演者は Bernard Whitman 牧師、コンコードの近郊の町 Waltham の町民で、ウォルサム・ライシイアムの会長であった。演題は「よくある迷信について」であった。

2月4日。Horatio Adams 博士という人による。演題は「人間についての博物学」

2月11日は講演ではなく、討論会であった。議題は大統領の任期に関してで、「任期が6年間で、再選の資格がないように規定するべく、合衆国の憲法を改正することがふさわしいであろうか」ということであった。

討論会の方法としては、まず討論のタイトルが前もって用意され、ついで会員の中から議題に関して賛成派の人々と反対派の人々が各々数名ずつ選ばれて討議に入るのだった。その選ばれたメンバーは、議題に関して必ず賛成と反対の人々が選ばれるだけでなく、討論を行うために、その場限りで賛成側、反対側につく場合もあった。要するに、討論の選手も聴衆も、その場で純粋に議論そのものを楽しんだようにみえる。討論を一定時間行ったら後に、ライシイアムの会長が審判となって、いずれの側が優勢であったかを判定し、勝敗を宣言する。もし会長に判断のつかない場合には聴衆の投票で決定することもあった。一般に討論会の議題は、講演会の場合と較べると、より政治的、時事的なテーマが多かった。それでも人々は、いわば相撲を観戦するような興味をもって勝負を楽しんだのではないと思われる。

この討論会は、当初は講演会とは別の催しで、開催の時期は講演会とほぼ交互に設定さ

れていたが、後には組み合わされ、1つの会合において講演が1つ、討論が1つという具合になった。記録によると、討論会の実施回数は122回となっている。それも1829年から41年までの間が記録され、しかもその件数は最初の10年間に集中しているのである。1842年以降は記録が皆無となる。討論会が実施されなくなったのか、それとも記録に留めなくなったのか不明である。(ライシイアムの記録には、時期によって粗密があるのは事実である。)いずれにせよ、次第に討論会がライシイアムで意義を失なっていたのは確かであり、その発展消長の有様は、それ自体研究に価するものといえよう。

既述のように、討論会の場合には政治的、時事的、社会的な内容のものが多かった。青年期のソローが、こうした討論会の場を見聞きし、時には選手として出場することによって、その社会改革的なテーマに影響を受け、次第に関心を深めて、ポレミックで戦闘的な姿勢と傾向を強めていったという可能性は大いにあり得るのである。ちなみにこの討論会において、奴隷制度廃止への呼びかけと女性の政治的権利拡張の趣旨が掲げられ、賛否の論戦が行われたことも各々数回は数えられる。ソローの社会改革への取り組みは、従来では彼自身の自律的な発想に基くとみなされていたようだが、私はこれに加えて、ライシイアムでの討論会の影響を重要視したいのである。1841年2月5日の討論会では、「非合法的抵抗 (forcible resistance) は一体ふさわしいであろうか」という題目のもとに、ソロー自身と兄のジョン・ソローが共に討論に参加している。その際に兄弟共に肯定の立場をとったと記録されている。この後1859年に、奴隷廃止論者の John Brown を頭とする一隊が、West Virginia 州の武器庫を襲撃し、逮捕、処刑されたが、この事件の際にソローはブラウンを弁護して講演活動を行い、ひいてはそれを、“Martyrdom of John Brown”と“The last

Days of John Brown”というエッセイに著した。このことと前述の討論会でソローのとった姿勢とを重ね合わせると興味深いものがある。

2月18日。コンコード・ライシームの会長 Ezra Ripley 牧師自らの講演,「果樹園の栽培について」

2月25日。Edward Bliss Emerson による講演,「アジアの地理と歴史」

3月4日。討論会,「州(マサチューセッツ)がボストンからオールバニー付近のハドソン川に至るまで鉄道を引くことは得策であろうか」,賛成側の勝。

3月11日。講演,「異教の神話」(講演者の氏名省略,以下同様。

3月18日。討論会,「コンコードに幼児学校を設立することは得策であろうか」,賛成側の勝。

3月25日。講演,「ルターの時代における宗教改革」

4月1日。討論会,「宗教改革は有益か」,賛成側の勝。

4月8日。「鉄道について」(以下,講演の場合には講演という表記を省略する。)

4月22日。「光学について」

5月13日。「植物学について」

5月31(?)日。「化学について」,実験つき。

6月10日。「自然哲学(物理学のこと)について」,実験つき。

9月2日。「西インド諸島の島,キューバについて」

9月16日。「自然哲学について」,この講演には「phantasmagoria lantern」(幻灯)による素晴らしい上映つき」というコメントが添えられている。「素晴らしい('splendid')」という称賛の言葉が注目されるのである。幻灯器の発明がいつだったかは定かではなく、既に17世紀の中頃にはヨーロッパでの使用の記録があり、1802年には幻灯の会がロンドンで開催されたという。下ってこのライシームの結成当時にも、やはり非常に画期的な道具であったようだ。

「ファンタスマゴリア」とは、ギリシャ語の語源で, phantasma(幻影)と agorā(集り)の結合したものであり,「走馬灯のように次々と移り変ってゆく映像」の意味である。それから派生して'phantasmagoric'という形容詞もある。この言葉は当時の合衆国の代表的な作家であった Edgar A. Poe や Nathaniel Hawthorne も時々用いている。たとえば,ポオの代表作“The Fall of the House of Usher” (1839)において,語り手の「私」が,友人アッシャーの古い館に招待され,その部屋に向かう通路に入り,そこにしつらえられた古式豊かな装飾品や調度品,紋章つきの戦利品を目にした際に,その形容として「ファンタスマゴリック」という語が用いられている。⁸⁾同様にホーソーンの長篇作 *The House of the Seven Gables* (1851)においてもこの語が見つかるのである。こうしてポオやホーソーンは,当時の流行語としてこの語を作品中に取り入れたのではないか,それとも,直接,彼ら自身がライシームの催し等で,幻灯を見た体験を使用したのではないかと推測される。

9月23日。前回の講演のくり返し。少し補足が添えられた。

10月7日。「博物学について」,やはり幻灯使用。

10月21日。「天文学について」、幻灯使用。

10月27日。「ヘブライの詩歌について」

11月4日。「知識の発達について」。この日は会の会計報告も行われた。会の収入は95.30ドル、支出は90.43ドルであった。

11月11日。「癖について」

11月18日。「天文学について」、幻灯使用。
10月21日の分のくり返しらしい。

11月25日。「自然哲学について」

12月2日。「地球上で生じた物理的变化」

12月9日。11月25日の講演の続き。

12月16日。「人間の気質」。その後、討論会、「ニューイングランドの諸州が、国に対する現在の影響力を今後も保持してゆけるであろうか」。勝負の判定の記述なし。

12月23日。「博物学について」

12月30日。「ニューイングランドの無月謝の学校の歴史と発展」。その後、討論会、「バンカーヒルの記念碑完成のために資金を集めるべく、州議会が宝くじを実施するのを認めるべきか」、判定記述なし。

(三)

これ以降1881年まで、実に52年に渡ってコンコード・ライシームでは講演会が続き、しかもその記録が残されているのである。その講演された年々の回数や内容の領域等を一覧表にして20—22頁に掲げておく。

52年間の講演回数の総計は795回であるが、第1位は自然科学に関するもので、94回となっている。この時期に近代科学が急速に発展し、その成果が広く世に紹介されているが、講演会がその状況を如実に反映しているといえよう。第2位は社会学の87回であるが、こ

れは分類の都合上、広範囲な内容にわたるものである。即ち、人間を集団の存在とみなした場合、国家や社会等という組織がその枠組となるが、そのような種々の人間組織の仕組みや活動の状況を述べたものは全てこの項目に収容した。いわゆる人類学もこの中に分類した。これに対して、別に「人間性」という項目を設けたが、これは「社会学」の項目とは逆に、人間の個人に該当する部分、即ち個々の人間生活や人間の精神に関する分野を扱ったものである。心理学もこの項目に組み入れた。講演回数は合計44.5回となり、このうち17.5回が心理学の分野である。回数として少な目のようだが、当時はまだ近代心理学は未発達で、フロイド理論も19世紀末を待たねばならなかったことが理由としてあげられる。ただし、以上の「社会学」と「人間性」の区別はそれ程厳密ではなく、境界領域というべき内容もあったのである。要するに人間を集団とみる場合と個とみる場合の相違であり、さらに、人間の営為を物量的に把えるか、その精神面を重要視するかとの区別をした積りである。第3位の「地理」は81回で、「社会学」の87回に接近している。この項目は、「地理学」、「地域研究」、それに「旅行や探検の報告」を加えたもので、分野として比較的まとまっており、定義し易かった項目である。

ところでコンコード・ライシームでは、1850年の頃が全体では中間の時期となっているが、この時期に関して興味深いのは、「科学」と「地理」の項目の盛衰の状況である。即ち「科学」は、前半の時期、1850年頃までは講演の題材として特に多用されている。コンコード・ライシームの初年度（1829年）においては、講演会は24回開かれたが、そのうち14回は科学に関する内容であり、実に全体の半分強の回数であった。既述のように科学の講演は、幻灯や実験つきで行われることが多く、特に人々の好奇心をそそったことと考えられる。つまり、学問であると共にショ

ウとしての要素も強かったと想像される。これに対して、地理や旅行談は、1850年近くまでは比較的少なかった。ライシームの初年度ではわずか2回に過ぎなかった。ところが1850年直前の頃から後半にかけては随分多くなり、講演回数の合計では首位の「科学」の項目にかなり接近してきたのである。その理由の一端としては、1850年頃になると、近代科学の飛躍的な発達につれて、世界地理や地域についての知識・情報が急に拡大し、又、旅行や探検のための交通手段や装備の発達も目覚しくなったためと推測される。こうして世界旅行や僻地又は極地への探検に出かける人々が増加し、そうした人々の珍しい旅の報告や情報が一般の人々に大層もてはやされたのである。たとえば、Steven Kagle の編著 *America: Exploration and Travel* によると、当時の合衆国においては、国内のみならず、世界各地についての旅行記・旅行談は大人気で、知識欲に燃える一般大衆に大歓迎されたという。⁹⁾ 旅の報告の書物は多数出版されたが、活字によるだけでなく、ライシーム等で講演され、世界中の僻地や歴史に名高い古趾等についての話が数多く語られたのである。要するに1850年頃は、一般大衆の間でも世界のことを知ろうとする外向的な意欲が強まってきた時期だと考えられる。

ちなみにソローの *Walden* も1854年の出版であり、ちょうどライシームの年代の中頃に相当している。*Walden* におけるソローの主張のエッセンスは人生論であり、人々に各自の人生を再検討するように促し、その真の生き甲斐を探究するように仕向けることにあった。けれども彼の真意が、彼の思う通りに人々に伝わったかどうか定かではない。むしろ当時のコンコードの村人達は、ソローがウォールデンの森で暮らした生活の具体的な体験記の方に関心を持ったのではないかと思われる。即ち、外国旅行や僻地・極地の体験談を聞くような気持だったのではなかろうか。

いわばコンコードにおけるロビンソン・クルーソーをソローに求めていたかの如く感じられる。ソローはそうした村人の好奇心をも理解しており、それをも満足させるべく、作品の中で彼の衣食住等の詳細なデータを添えているのである。さらに彼は、作品の「結論部」(“Conclusion”)の冒頭において、次の4行の引用詩を掲げている。これはイギリスのエリザベス朝後期のアマチュアの詩人 William Habington の詩“To My honoured friend Sir Ed. P. Knight”の一節である。

「君の目を内に向けよ。そうすれば、君の心に、千もの未発見の地域が見つかるだろう。そこを旅せよ。

そして自家の宇宙誌の大家となれ」¹⁰⁾

即ち、各自の心の中には、宇宙に比敵するような広大な未知の領域があり、その世界こそ真に探検に値するものだ、と主張しているのである。ソローはさらに「結論部」で、その当時行われ出した北極や南氷洋の探検、アフリカの未知の領域の探検等の事実を紹介している。そして、このような現実の探検が、犠牲を伴い、労多くして精神的に得ることが少ないことを批判し、それに較べて、自分自身の心という領域こそ真に探検すべき価値のある場所だ、と主張したのである。こうしたソローの発想は一見唐突のように感じられる。けれどもその当時、コンコード・ライシーム等で、地域研究や世界旅行、僻地の探検についての講演が大好評であり、切望されていたという事情を考え合わせると、この状況はよりよく理解できよう。いわばソローは、そうした旅行談のブームに便乗して、人々に自己の心や人生の点検を、探検になぞらえて、すすめていたのだと考えられる。あるいはむしろ、実りの乏しい、浅白な現実の旅行や探検のことを引き合いに出して、それとの対照で、人生の真の価値への目覚めを促していた

のだともいえよう。いずれにせよ、当時のライシウムの風潮を踏まえて *Walden* を読み返すと、ソローの主張が当時の世相をよく反映していることが窺える。彼は「森の哲人」ではあったが、同時に世相の鋭い洞察者を兼ねていたのである。

Nathaniel Hawthorne の場合にもライシウムのこうした風潮との関係が見られるようである。部分的にであれ科学を題材とする彼の作品 *The House of the Seven Gables* (1851) が出版され、その約10年後にイタリアの旅を材料にした *The Marble Faun* (1860) が刊行されているからである。前者は、当時としてはモダンな科学者というべき銀板写真師の Holgrave が重要人物の一人であり、後者では、イタリアの主な観光の名所旧蹟が、さながら絵巻物を繰り広げるように紹介されている。くり返しになるが、コンコード・ライシウムの状況では、19世紀前半に科学の講演が盛んで、中期から後半では地理や旅行談が増加していったのであるが、この傾向とホーソーンの二つの作品の状況はあたかも軌を一にしているようにみえる。それは偶然の一致かも知れないが、一考の余地はあると思われる。というのも、ホーソーンは、自分では講演を行わなかったが、コンコードの近隣というべき Salem の町のライシウムで書記 (secretary) をしていた時期があり、その任務として自ら講演者を探しにゆき、依頼することも多々あったからである。ソローを講演者としてセイラムに招いたこともあったという。要するにホーソーンはライシウムの状況を熟知していたのであり、それが彼の作品に何らかの形で反映したとしても不思議ではない。

再びコンコードの講演会の統計資料に目を戻すと、第4位は「題目不明」の項目である。講演会についての記録に時々疎密があり、題目が付されていない場合もかなり多かったのである。書記になった人物の性格や発想にも

よると思われる。第5位は「文学」の76回であるが、これには神話や言語学のことも含まれているので幅が広がって、回数が増加したという事情がある。けれども、文学に関しては、講演の他に文学作品の朗読も時おり行われたのであり、特に1850年以降は16回が記録されている。これは講演回数には入れていないので、講演と朗読を合わせて考えると、コンコードではこの当時から文学への関心が高かったといえる。講演の題目で最も多く選ばれたのはやはり Shakespeare であった。第6位の「歴史」は、概して2通りの内容に分割できる。1つはアメリカ自国の独立革命や独立期に関するもので、アメリカへの愛国心、又は郷土愛の気持が明示されていると思われる。もう1つの内容は外国の歴史に関するもので、たとえばフランス革命史や古代エジプト史のような話が多くなされている。これは、外国や異境への好奇心につながるもので、先ほど揚げた外国旅行や僻地での探検談への人気ともある意味で結びつくように思われる。第7位の「政治・法律」の項目も60.5例あり結構多い。先に述べた討論会でもこの類の議題が多かったことを考え合わせると当時の人々の関心の深さが察せられるのである。合衆国は当時独立後100年足らずの時期であった。国体としてまだ不安定であり、それに伴う種々の政治と法律に関する現実の未解決の問題が多かったためと考えられる。第8位の「哲学・倫理」は51.5回、第10位の「教育」は39回を記録している。両者とも講演の題目としては堅苦しく感じられるかも知れないが、これだけの数の講演が行われたということは、やはりライシウムの本来の趣旨が忘れられることはなかったからだとも考えられる。即ち、元々はライシウムという発想そのものが、文化の啓蒙にあり、学校教育の育成、成人教育の支援ということを目指していたのである。哲学・倫理・教育の講演がこれに貢献したことはいうを待たない。第9位

の「人間性」についての項目は、ごく簡単に
だが既に触れた。以上、ライシームの講演
会での主な演題とその内容を概観した。

アメリカ・ルネサンス期の作家でいわゆる
ライシーム活動に関わりのあった作家達と
しては、既にあげたソローとホーソーン、ポ
オの他に Herman Melville と Walt Whit-
man をあげねばならない。言い代えれば、こ
の時期の主要な作家達は、全て何らかの形で
ライシーム活動に参加していたのである。
ライシームが文化啓蒙と教育の育成を目標
としたことを反映したせいか、当時の主要な
作家達はやはり啓蒙的であり、読者に人生へ
の教訓を強いるという傾向がみられることは

否定できない。そのことは文学作品として短
所となったかも知れない。けれども、この時
代の作家達は、単に活字を通して不特定の読
者を想定しただけでなく、講演活動を通して
生身の聴衆に触れるという直接体験を味わっ
ている。この体験はきっと彼らの作品にプラス
に作用したに相違ない。ライシーム活動を
さらに詳しく検討することにより、当時の
アメリカ文化と文学の魅力を分析する手掛け
の一つが与えられると確信するゆえんである。
この時代は、「書く」という作業が、生身の人
間に「話しかける」という行為に直接つながっ
ていた時代だからである。

コンコード・ライシーム（講演会）

1829年—1850年（分野別の回数）

〔年度〕	科	社	地	不	文	歴	政	哲	人	教	宗	技	健	芸	経	農	未	文化	L	計
1829年	14	1	1.5	1	2	0.5			2	1		1				1				24
30年	12	2	4			2		2	3	2		1	3		1	1				32
31年	8	3	2		2	6	3					2	3					1	1	31
32年	1	1		2	2	2	2	2	1	3		2			2					20
33年	2	3	3			2	3	1	1	1		2	3		2				1	24
34年	4	2		3	1	0.5		3	2	1	0.5	1	1							19
35年	5.5	2		1	1	3	1	1	1	3.5	4		1	1						25
36年	6	5		2	1	1	1			3	5		2		1					27
37年	1.5	3				1	2		1	4		1	1	0.5						15
38年	1	1		1	5	2	3.5	1.5	6.5	3	0.5	1	1					1		28
39年		5			4	2.5	3	1	4	1	1.5	1			1					24
40年		3	1	1	4	1	4	1	2	3	1	1		1		1				24
41年	2		1		1	2	1				1							1		9
42年				4			2								1					7
43年	2	3		14	2		3			1						1				26
44年		3	1	1	1		3	2		1	2									12
45年	3	1	3		1	4	3	1		1	1		1							19
46年	1	1		2	6	5	1.5	1	1		1	2								21
47年				1	3	3	2		1											10
48年		1	1	9				1				1								13
49年		3	5	1	3			5	1											18
50年		2	5	1	2	3		1		1					1		1			17
計	63	45	26.5	44	41	40.5	38	23.5	26.5	29.5	15	16	16	2.5	9	3	1	3	2	445

1851年—1880年（分野別の回数）

〔年度〕	科	社	地	不	文	歴	政	哲	人	教	宗	技	健	芸	経	農	未	文化	L	計
1851年	1.5	2	4	4	5.5	1	3		1			1		1						24
52年		1	3.5		2	0.5	3		2	1	2			1	1	1				18
53年		3	4			1	1		2		1									12
54年	2	2	2	1		2		3		2	2			1						17
55年		3	2.5	1	1	1	0.5	1.5		1	1			1.5		2				16
56年	0.5	2	0.5			2.5		2	1					1.5		1				11
57年	2	1	2	2	9	1		1								1				19
58年			2		2	2				1		1					1			9
59年	2.5	1	1	1	0.5	3		3	3											15
60年	1.5	5	1		2.5	2	1	1	1		2									17
61年		2	2		1	1	1	1	1											9
62年	1	0.5					1	3.5		1										7
63年		3				1	2	2.5		0.5					1					10
64年	1	3	3					1						1						9
65年		1	2	3	1.5	1	5	0.5			1									15
66年				9	1	1	2										1			14
67年	1	1	1	2	1	2		1	1	1						1				12
68年	2	2.5	2		2		1	1										0.5		11
69年	1	1	1	1		1	1	1												7
70年	3	2	1		1	1		1	1						1		2			13
71年	2		1	2	1															6
72年		1		3				1	2	1										8
73年	1	1	3	1		1				1					1					9
74年	2	1	1	1	1									1			1			8
75年	1.5		2.5	2	2				1								1			10
76年	2.5	0.5	3			1		2				2		1						12
77年	2	0.5	0.5	1		1								2						7
78年		1	5			1	1													8
79年	1		2		1	1		1	1		1								1	9
80年		1	2			3			1			1								8
計	31	42	54.5	34	35	32	22.5	28	18	9.5	10	5	0	11	4	6	6	0.5	1	350

1829年—1880年

合計	94	87	81	78	76	72.5	60.5	51.5	44.5	39	25	21	16	13.5	13	9	7	3.5	3	795
%	11.8	10.9	10.2	9.8	9.6	9.1	7.6	6.5	6.0	4.9	3.1	2.6	2.0	1.7	1.6	1.1	0.9	0.4	0.4	100
	科学	社会学	地理・旅	題名不明	文学・語学	歴史	政治・法律	哲学・倫理	人間性・心理	教育	宗教	技術・工学	健康	芸術	経済	農業	未決定	文化論	ライシーアム	

付 記

回数で0.5という小数点は、分野が二つの領域にわたる場合に2分したためである。「未決定」の項目は、分野の決定が困難であった場合を意味している。

討論会の回数は既に述べたように122回であった。その他、音楽の演奏が地元の Concord Band によりなされ、16回を記録している。Walter Harding の *The Days of Henry Thoreau* (P. 29, 注参照) によると Concord Lyceum での講演は全体で784回、討論会は105回となっている。小論での合計と一致しないが、小論ではくり返しの題目も、前からの継続の題目も各々1回としてカウントした。というのも、講演が実施されたという事実を重んじたからである。従って小論での合計数の方がやや多目になっている。なお、1881年には講演は行われず、役員会のみが記されている。これ以降の記録は残されていない。

注

- 1) *Oxford Companion to American Literature*, Fifth Edition (Oxford U. P., 1983), 452.
- 2) Carl Bode, *The American Lyceum* (Southern Illinois U. P., 1968), 8—18. 亀井俊介『サーカスが来た！—アメリカ大衆文化覚書』(文春文庫, 1980)「さすらいの教師たち—にぎやかな講演運動」, 99—150. 小論の拠り所となったものはこの両書であった。
- 3) *Oxford Companion*, 452.
- 4) Carl Bode, 24—26.
- 5) Kenneth Cameron, *The Massachusetts Lyceum During the American Renaissance* (Hartford, Conn.: Transcendental Books, 1969), 110. この書物の中から Concord と Lincoln の Lyceum の記録を抽出した著書がやはり K. Cameron により出版されている。*Emerson and Thoreau Speak: Lecturing in Concord and Lincoln During the American Renaissance* (Hartford: Transcendental Books, 1972). これらの著書は、小論の扱うコンコード・ライシーアムの記録の源泉となった。1929年度(初年度)の講演題名、及び講演についての資料の一覧表もこの記録を基にして作成したものである。
- 6) Walter Harding, *The Days of Henry Thoreau*, (Princeton, New Jersey: Princeton U. P., 1982), 29.

- 7) K. Cameron, *The Massachusetts Lyceum*, 112—118.
- 8) *Edgar Allan Poe's Works* (AMS, 1979), Vol. III, 277.
- 9) Steven Kagle, ed., *America: Exploration and Travel*, 70—71.
- 10) Henry Thoreau, *Walden, The Writings of Henry D. Thoreau* (Princeton, New Jersey: Princeton U. P., 1971), 320. 原詩は次のとおり。

“Direct your eye right inward, and you'll find

A thousand regions in your mind

Yet undiscovered. Travel them, and be

Expert in home-cosmography.”

Concord Lyceum

Kazuto Ono

Throughout the 19th century, Lyceums, the cultural and educational enlightenment movements were so popular among American people. For instance, Concord Lyceum in Concord, Massachusetts was quite active during the term: 1829-1881. This article tries to investigate the enlightenment activities of the Lyceum, referring to the two academic works: Carl Bode's *The American Lyceum* (1968) and Kenneth Cameron's *Massachusetts Lyceum* (1969). There were 795 lectures given and 122 discussions made in Concord Lyceum, the titles of which are compiled into a classified table under the category of each academic field at the end of this article. In order to give a concrete example of the cultural effects of the Lyceum on the literary people in the American Renaissance period, Henry D. Thoreau is represented here, since he lived almost through the Lyceum age, and most of his works are based on his lecture activities there.